

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	畑打
Author(s)	宮崎, 義則
Citation	龍南, 192: 42-42
Issue date	1924-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8772
Right	

冬に向く山を下り居り小鳥らが雨雲の中に深く鳴くこゑ
鳥の音を耳によろこびて下る道に思はぬものか雨蛙鳴く
山の上は早咲き出でし山茶花 石露手に餘る程を折り持ちに
けり

○

朝夕べ軒に觀めし柿の葉のもみぢもせず散るが寂しき
柿の木も裸とありぬ庭土のひた土に陽の照れるさみしさ
朝廷に柿の落葉もたえてへりぬ 接骨木はとこも今は葉を落すらむ
庭の端はたなすび引かれしあら土に彼岸花の莖いまだ立ち居り
雞頭けいずのとさか老ひつゝ置く露に霜のたよりを思ふ頃かも

畑 打

宮 崎 義 則

春 寒 や 大 師 詣 う で の お 百 姓
畑 打 や 老 い の 夫 婦 の 日 も す が ら

誰も來ぬこゝらあたりや草青む
彼岸會や半日休む小百姓
貴ひ風呂に集へる人や春の宵
花曇り今日も日ねもすさまよへり
うつろ木に蜂の空巢のありにけり
鹿の子を見てゐる宿の二階かな
窓あけて裏山くらしほとゝぎす
日向葵に夕日當れるお藏かな
田舎路や晝も虫なくこのわたり
町の灯も遠くなりたる枯野かな
ガタ馬車の走り初めし枯野かな

阿 蘇 野 營 二 句

天 幕 に 靈 さ ぬ 話 や 夜 半 の 秋
山 頂 の 夜 更 け ま さ り し 銀 河 可 な